

試合終了後、握手を交わし、互いの健闘をたたえたダルクチームと県警チーム＝中央市関原

薬物依存からの脱却に協力

県警と施設がソフトで交流

薬物依存症からの脱却を目指すリハビリ施設「ダルク」のチームと立ち直りを支援する県警のチームが中央市でソフトボールの交流試合をした。「負けないぞ」「しっかりな」。ユニホームを泥だらけにしなが、一緒に白球を追いかける姿から、それぞれのそんな思いが伝わってきた。
(佐藤美鈴)



全国から100人参加

山梨ダルク「懐の深さに感謝」県警「今後も続けたい」



互いに手加減することのない真剣勝負が続いた。中央市関原

試合は11日午後、中央市のグラウンドであった。秋晴れの青空。山梨をはじめ、東京、静岡、名古屋など全国10カ所にあるダルクから駆けつけた100人のメンバーと南甲府署、県警本部ソフトボールクラブの警察官計25人がグラウンドに並んだ。全国から集まったのは、こうした交流試合が山梨県警独自の取り組みだから。スポーツを通じて薬物からの立ち直りを支援しようというもので、今年で3年目。リハビリ活動としてソフトボールをしていた山梨ダルクが練習試合の相手を探している

ことを知った県警が、申し入れたのがきっかけになった。昨年まで5試合を戦い、県警が全勝。今回は、ダルクが「ドリームチーム」を結成して接戦になったが、最後は県警チームがサヨナラ勝ち。ホームランやヘッドスライディングもあった。ファインプレーのたびに、応援席からは拍手や掛け声が絶え間なく続いた。観客席には、依存症から立ち直ろうとする息子のプレーを、じっと見守っている両親の姿もあった。

試合後、山梨ダルクの佐々木広施設長(42)は「ソフトボールを通じて一つになれた。県警の懐の深さに感謝しています」と語った。また、県警チーム監督で、南甲府署生活安全課係長の深沢幸二さん(53)は「お互い、次につながるいい試合ができました。これからも続けていきたい」と話した。

県警によると、ダルクとの交流は、違法な薬物を密売する暴力団への牽制効果もある。日本ダルク(東京都荒川区)の近藤恒夫代表は「薬物の再発防止には仲間や地域社会とのかわりが必要。交流試合などの取り組みは全国にも広がってほしい」と期待を込めた。